

脱罪術 其四 慈善事業

此時に當て余は自己以外に援助の存せざるを悟れり、教師も教會も學問も自然も余の心中の痛を治する能はざるを知れり、余は自ら勉めて畏懼戰慄て己が救を全ふせむと覺悟せり(腓立比書二章十二節)、罪の位置は余の意志に存すれば余は意志を以て之に打勝つべきなり、余の罪に責めらるゝは余は余の爲めにのみ余の思考を消費しつゝあればなり、今よりは「我れ」なる念を全く去り、世の憐れなるもの貧しきものを救はんにはなか余をして無私完全なるものとなし得べからざらんや、完全は安逸の中に求むべからず、學海に棹すも墨水に舟を浮ぶるも快を求むるの精神に於ては一なり、狐を狩り出すも眞理を探り出すも探究の樂を目的とするに至ては一なり、罪は私慾なり、私慾を離るゝは罪を離るゝなり、聖書は曰はずや

全からん事を欲はゞ往て爾の所有を售て貧者に施せ然らば天に財あらん

(馬太十九章二十一)

又

神なる父の前に潔くして穢なく、事「つかう」ることは孤子と寡婦を其患難の中に眷顧「みなほ」また自ら守て世に汚れざる事なり

(雅各書一章二十七)

慈善は他人の爲めにのみにあらざるなり、完「まうた」からんとするもの潔からん事を願ふものは自を慈善事業に投ずべきなり、我等は物を與へて靈の賜を受くべきなり、然り宗教とは慈善を云ふなり、貧しきものに盡すは神に盡すなり、而して余に此觀念を注入せしものは詩人ローエルの作に係る「ラウンフホール公の夢」(Sir Launfal's

Dream)なる詩篇なりき、

ラウンフホル公は中古時代の名士にして一城の君主なりき、彼は熱心の基督信者なりければ常に神と教會の爲めに大功を奏し以て忠實なる天主教徒の本分を盡さんと思ひ居れり、時に彼の心中に浮び出し一策は、曾て基督が彼の弟子等と共に晚餐の式を守られし時用ひられし金の盃にして今はその行衛を失ひたるものを探り出さんとするにありき、ラ公思へらく此事實に救主に對し天主教會に對しての大事業なり、昔時より其探究に従事せし人尠からずと雖も一つも功を奏せしものなし、よし、我は今日より萬事を放棄し身命を捨て、も此重寶の所在を尋ねんと、因て心を決し、別を故郷の人に告げ、甲を環し肥馬に跨り、勇氣勃勃として彼の城門を出でたり、時に癩病を患るものあり、來て公の傍に伏しナザレの耶穌の名に依て差少の施與を乞へり、ラ公音聲を荒らげて曰く「余は皇天の命に由り救主の金盃を探り出さん爲めに旅出するものなり、爾汚穢物何ぞ我を煩はずや」と、病者は尙ほ袖に縋て施與を乞ふ、ラ公大に悲り懷中より金貨一個を取り出し之れを地上に投じて曰く「爾之を取れ我は爾を顧みるの暇なし」と、依て鞭を鞍馬に加へ顧みずして去る、是より數十年間ラ公歐亞の諸國を經巡り危難を犯し丹精を盡し救主の金盃を探り求むるも得ず、終には貧困城主の身に迫り來り、彼又霜を頭上に戴くに至る、公青年時代の希望終に達すべからざるを悟り故國に皈り余命を父母の墳墓の土に終らんと決せり、公の再び城門に近くや身に襁褓を穿ち手に一杖を曳き、冬寒くして霜雪小川の水を氷結せし頃なりき、時に又癩病患者あり、其相を窺へば數十年前公の尙ほ壯なりし頃大望を抱ひて探究の途に就きし時彼の馬前に跪きし貧人なりき、艱苦困難は今や公の心を和げ、

推察おもひやりの情類しきりに公の胸中に起れり、公今與ふるに金銀なし、依て携へし所の一個のパンを取出し之を半折して貧人に向て曰く「余は今君に豫あたふるに只此パンあるのみ、今其半を君に呈す、ナザレの耶穌の名に依て之を受けられよ」と、又腰に挟みし手杓を取り、路傍に流れつゝありし小川に下り、自ら堅けんびよう氷を碎て一杯の冷水をくみ、癩病患者に與へて曰く「惠ある余の救主の名に依て之を飲め」と、乞食の患者は丁重なるラ公の親切にあづかりつゝありしが、忽にして彼の形を變じ、榮光ある基督となりてラ公の前に立ち、手を伸して祝福を彼に與へ、靜肅溫雅言はんかたなく、感慨を以て襲はれたるラウンフホール公に謂て曰く、

Lo, it is I, be not afraid!

In many climes without avail

Thou hast spent thy life for the Holy Grail;

Behold, it is here — this cup which thou

Didst fill at the streamlet for me but now;

This crust is my body broken for thee,

This water His blood that died on the tree;

The Holy Supper is kept, indeed,

In whatso we share with another's need;

* * *

見よ、われなるぞ懼るゝな、

聖き益求めんと

諸國を巡るも益ぞなし、

見よ、さかづきはそこにあり

小川にくみし手杓なり、

さきて與へし其パンは

さかれし我の躰なり、

その冷水は十字架の

上より流れし我血なり、

貧き人とともにする

食こそ實にや聖餐なり。

ラ|公驚き醒さむれば之れ一場の夢なりき、公大ひに悟れり、神に盡し教會に盡すは天下を經巡り目覺ましき大功を奏するにあらず、世の貧しきものは基督なり、貧者を救きゅうじゆつ恤するは基督に事つかふるなりと、因て爾來城門を開き倉庫を放て城下の窮民を養ひ以て公の一世の快樂となしたれば、國榮え民安んじ、公自らも平安と喜悅とを以て世を終へしと云ふ。

讀でこゝに至て余は歡喜を以て充たされたり、余は完全に達する途を得たり、余は眞正の基督教を會得したり、余は慈善事業を以て一世の目的と定めたり。

爰に於て余は解剖書顯微鏡を打捨てジョン・ハーワード、エリザベス・フライ、スチブン・グレ、ツト等の傳記を讀めり、サラ・マーチンの功績は余をして微力ながらも慈善家たり得るの獎勵を與へたり、ブレース氏の基督行績論(Gesta Christi)は慈善事業に顯はるゝ基督の勢力を示すものとして余の坐右を離れざる書となれり。

余の志を決して慈善病院に入りしや余は實に無常の快樂を感じ、鶏鳴未だ曉を告げざる前に起て病者の爲めに衣食を整へ、その靴を取りその足を洗ひ、その僕となりその給仕人となり、發せんとする余の短氣を壓へ、熾んとする余の慢心を静め、以て偏に基督の溫順と謙遜とに倣はんとせり、患者に靴をもて蹴らるゝ時、面部に唾せらるゝ時、余は之れぞ救主の忍耐を學ぶべきの機と思ひ、溫顔を以て彼に對し、微笑を以て彼に報いたり、余は伊國の愛國者サボナローの言を思ひ出せり、

余の寺院に入りしは忍ばん事を學ばん爲なり、艱難我に迫りし時は我は學者の眼光を以て之を學び、之をして常に愛し常に恕すべき事を我に教へしめたり。

看護人となりて余は始めて短氣の無益にして有害なるを悟れり、余は溫良の至大なる勢力を有する事を學べり、無限の忍耐のみが慈善家たり得るなり、白癡教育者として有名なるジェームス、ビー、リチャード氏曾て余輩に告て曰く、

汝一度試みて成功せずんば二度試みよ、二度にて足らずんば百度試みよ、而して尙ほ汝の目的を達するを得

ずんば二百度三百度四百度五百度試みよ、寛大なれよ、一千一度試みよ。

基督の言はるゝ七十度を七倍する寛容とは此事を言ふならん、實に忍耐なきものは慈善家たるべからざるなり、慈善病院は基督信徒の最好試験所なり、之に堪ゆるもののみがナザレの耶穌の弟子たるなり、説教壇講義室共に信徒の眞偽を判分する所にあらざるなり。

慈善は天使の職たるに相違なし、慈善なきの宗教も道德も眞正なるものにあらざるなり、慈善は宗教の花なり、菓なり、其國の慈善に依てその道義心の程度を察するを得べし、神社佛閣如何程壯嚴なるも孤兒をして饑に泣かしむる國民は君子國の名稱に與かるべからざるなり。

然れども慈善は善人を造るものにあらざるなり、慈善は愛心の結果にしてその原因にあらず、慈善事業に従事すれば自ら慈善家となり得べしとの觀念は事實らしく見へて事實にあらざるなり、心中已に慈善心の存する時悲哀に沈めるものを見て終に大慈善家となりし人尠からず、ジョン・ハワードが佛國の獄屋に繋がれし時その慘狀を見て終に監獄改良者となりし如く、ムーン氏がアルプス山中に盲目の少女が「アベ、マリヤ」の祈禱を唱へつゝあるを見て終に盲人教育の先導者となりし如く、慈善は我等の心中に存する慈善心を鼓舞するものに相違なし、然れども噴水は水源の平面より高く登る事はざるが如く、慈善も我心中に存する愛心に越ゆる事はざるなり、若し愛心に越ゆる慈善を實行せんとすれば慈善は變じて偽善となり、慈善の快樂全く去て不平傲慢功名心等の惡靈來て再び我を惡魔に引渡すに至る、信仰不相應の慈善程危険なるものはあらざるなり、慈善は幾多基督信徒の躓石となりし事は悲しむべき事實なり。

パリサイの人たちて自ら如此いのれり、神よ我は他の人の如く強索不義姦淫せず亦この税吏の如くにもあらざるを謝す、われ七日間に二次斷食し又すべて獲るものゝ十分の一を獻げたり。

(路加傳十八章十一、十二)

我をして自己を高ぶらしむるに至れば我の善行は我が敵なり、墮落は高き程強し。人若し慈善てう高き所より落つる時は殆ど再び回復すべからざるに至る。

慎しめよ汝孤兒院を設立して神と人とに事へんと欲するものよ、汝の慈悲心已に世人の承認する所となり、汝は無私なる慈愛家として世に賞揚さるゝ時、是ぞ汝の無限地獄に墮落せんとする危急の場合たるを知れ、殊に此物質的の時世に於て事業は精神より持囃さるゝ時此危険最も大なり、エリサベス^{もてはや}Ⅱフライ夫人は彼女の聲名天下に轟き渡り國王彼女に謁を賜はらんとせしや恐懼遁れて跡を隠せしとかや、ワードの遺言は只二ありしのみ、則ち彼の子息にして狂を病みしものゝ快復せんこと、彼の爲めに石碑を建てざらんことなりき、我に敵あるこそ幸なれ、我が名の知れざるこそ安全なれ、慈善家たるの名に對し誰か神聖なる敬慕を呈せざらんや、若し世に非常に功名を求むるものありて最も平易に公衆の尊敬を受けんと欲さば慈善事業に従事すべきなり、説教家として平々凡々なるものも、政治家として名なきものも、慈善家としては世の注意を惹き得べきなり、余は心に此危険を感じてより慈善事業に従事する人を傍より賞め立つる事を止めたり、斯人若し巨人なれば賞讃さるゝを以て迷惑を感じるのみ、小人なれば之れが爲めに誇り危難を彼の靈魂に導くなり、基督曰く

汝等人に見せん爲めに其義を人の前に行すことを慎め、もし然らずば天に在す爾等の父より報賞を得じ、是故

に施濟ほどこしを行なすとき人の榮を得ん爲めに會堂ちまたや街衢ちまたにて偽善者の如くらつば箝くわを己が前に吹かしむる勿れ、我まことに爾等に告ん彼等は既にその報賞を得たり、なんぢ施濟をなすとき右の手の爲すことを左の手に知らする勿れ、かくするは其施濟の隠れんが爲めなり、然らば隠れたるに鹽みたまふ爾の父は明顯に報ひたまふべし。

(馬太傳六章一節より四節迄)

嗚呼之れ今日我國の慈善と稱するものなるか、慈善音樂會、慈善舞蹈會、一慈善は百新聞の登錄する所となり、百辨士の口頭に上る、今や人類は善行の飢饉を感じつゝあるなり、一行は萬言を以て天下に吹聴さる、恐るべきは慈善家の名なり。

余は安心術として慈善事業の無益なるを悟れり、否な無功なるのみならず余は一層余の缺點てきしを摘てき示せられ、尙一層の懼怖おそれを抱き、前日に勝りて心靈未來の危険を感じるに至れり。

Where wouldst thou fly? To works — to empty forms

With thy dove wings?

Will these give shelter from eternal storms —

These poor dead things?

And * working* answers with a voice severe,

* Turn back, mistaken soul! Rest is not here!*

Henry Burton, in Sunday Magazine.

羽翼はねあらば何處に飛ばんわが魂よ、
事業へ乎、心よりせぬ事業へ乎。

永久とこしよのあらしはこゝに吹かぬかや、
事業には、死せるうはべの事業には。

恐るべき聲もて事業答へける、
こゝになし、まどへる魂よこゝを去れ。

ヘンリー、バートンの歌

この時にあたり、私は自分以外に助けが存在しないことを悟った。教師も教会も学問も自然も、私の心の中の痛みを癒すことができないと知った。私は自ら努めて、畏れおののきながら自分の救いを完全にしようと思つた（ピリピ人への手紙二章十二節）。罪の原因は私の意志にあるため、私は意志をもってこれに打ち勝つべきだ。私が罪に責められるのは、自分のためだけに思考を費やし続けているからだ。今からは「私」という考えを完全に捨て、世のあわれな人、貧しい人を救うことで、どうして私が無私で完全な者となり得ないことがあるのか。完全は安逸（気楽で安らかなこと）の中に求めるべきではない。学問の海に漕ぎ出すのも、墨水（隅田川を指すが、ここでは俗世間や享楽の意）に舟を浮かべるのも、快楽を求める精神においては同じである。狐を狩り出すのも、真理を探り出すのも、探求の楽しみを目的とする点では同じである。罪は私欲であり、私欲を離れることは罪を離れることである。聖書はこう言っている。

完全になりたいのなら、帰って、あなたの財産を売り払って貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、天に宝を持つことになります。

（マタイの福音書十九章二十一節）

また、

父である神の御前でよく汚れない宗教とは、孤児ややもめたちが困っているときに世話をし、この世の

汚れに染まらないように自分を守ることです。

(ヤコブの手紙一章二十七節)

慈善は他人のためだけにあるのではない。完全にであろうとする者、きよくあろうと願う者は、自らを慈善事業に投じるべきである。私たちは物を分け与えることで、霊の賜物を受けるべきである。宗教とは慈善のことを言うのだ。貧しい人に尽くすことは、神に尽くすことである。

そして、私にこの観念を注入させたのは、詩人ローエルの作による『ラウンフホル公の夢』(Sir Launfal's Dream) という詩篇であった。

ラウンフホル公は中世時代の名士で、ある城の君主であった。彼は熱心なキリスト信者であったため、常に神と教会のために大功を立てて、忠実なカトリック教徒としての自分を果たしたいと思っていた。ある時、彼の心に浮かんだ一つの策は、かつてキリストが弟子たちと共に晩餐の式を守られた際に用いられ、今はその行方がわからない金の杯(聖杯)を探し出すことであった。ラウンフホル公は、これが実に救い主に対し、カトリック教会に対しての大事業だと考えた。古くからその探求に従事した人は少なくなかったが、一つも成功した者はいなかった。「よし、私は今日から万事を放棄し、身を捨ててもこの重宝の所在を捜し求めよう」と決心した。そこで故郷の人々に別れを告げ、甲冑をまとい、肥えた馬に跨り、勇気盛んに城門を出て行った。その時、癩病を患っている者がおり、公の傍らに伏して、ナザレのイエスの名によってわずかばかりの施しを請い願った。ラウンフホル公は声を荒げて言った。「私は天の命令により救い主の金の杯を探し出すために旅立つ者である。お前のような汚れた者が、どうして私を煩わせるのか。」病者はなお袖

にすがって恵みを求めたため、公は大変怒り、懐中から金貨一個を取り出し、それを地面に投げつけて言った。「お前はこれを取れ。私にはお前を顧みる暇はない。」そして、鞭を馬に加え、顧みずに去っていった。それから数十年間、ラウンフホール公はヨーロッパとアジアの諸国を巡り、危難を犯し、丹精を尽くして救い主の金の杯を探し求めたが、ついに見つけることはできなかった。ついには貧困が城主の身に迫り来る。彼もまた白髪頭になるに至った。公は青年時代の希望がとうてい達せられないことを悟り、故国に帰り、余生を父母の墳墓の土で終えようと決意した。公が再び城門の近くに戻った時、身にはぼろぎれをまとい、手に杖を引きずっている、またあの癩病の患者がいた。冬の寒さで、霜や雪が小川の水を氷っていた頃である。その時、その様子をうかがうと、数十年前、公がまだ壮年であった頃、大望を抱いて探求の途にいた時、彼の馬前にひざまずいた貧しい人であった。厳しく辛い苦労や困難は今や公の心を和らげ、思いやりの情がしきりに公の胸中に湧き起こった。公は今、与える金銀はない。そこで携えていた一個のパンを取り出し、それを半分に割って貧しい人に向かって言った。「私は今、君に与えるパンがこれしかないのです、その半分を君に差し上げよう。ナザレのイエスの名によってこれを受け取ってくれ。」また腰に挟んでいた手杓を取り、路傍に流れていた小川に降りて、自ら堅い氷を砕いて一杯の冷水をくみ、癩病患者に与えて言った。「恵み深き私の救い主の名によってこれを飲みなさい。」物乞いの患者は、丁重なラウンフホール公の親切を受けているうちに、忽ちにしてその姿を変え、栄光あるキリストとなって公の前に立ち、手を伸ばして祝福を彼に与えた。静粛で温雅、言葉では言い表せない。深い感動に襲われたラウンフホール公に語りかけた。

見よ、私である、懼れるな。

聖なる杯（聖杯）を求めようと、

諸国を巡るも益はない。

見よ、杯はそこにある

たった今、お前が小川で私のために入れたこの手杓である。

割いて与えたそのパンは、お前のために裂かれた私の体である。

その冷水は、十字架の上から流れた私の血である。

眞の聖餐は、人が互いに必要とするものを分かち合うことの中に守られる。

ラウンフホール公が驚いて目を覚ますと、それは一場の夢であった。公は大いに悟った。神に尽くし教会に尽くすのは、天下を巡り目覚ましい大功を立てることではない。世の貧しい者こそキリストであり、貧しい者を救済することはキリストに仕えることである、と。そこでそれ以来、城門を開き、倉庫を開放して城下の窮民を養うことを公の生涯の楽しみとした。その結果、国は栄え民は安らぎ、公自身も平安と喜びをもって世を終えた、と言われている。

読みつつここに到って、私は歓喜に満たされた。私は完全に達する道を得た。私は眞正のキリスト教を会得した。私は慈善事業を一生の目的と定めた。

ここに於いて、私は解剖書や顕微鏡を打ち捨て、ジョン・ハワード、エリザベス・フライ、スチーブン・グ

レットなどの伝記を読んだ。サラーマーチンの功績は、私に微力ながらも慈善家たり得るといふ奨励を与えた。ブレース氏の『キリスト行跡論』(Gesta Christi)は、慈善事業に現れるキリストの勢力を示すものとして、私の座右を離れない書物となった。

私が志を決して慈善病院に入った時、私は実に無上の快楽を感じた。鶏がまだ夜明けを告げない前に起きて病人のために衣食を整え、その靴を取り、その足を洗い、そのしもべとなり、その給仕人となり、出ようとすると私の短気を抑え、盛んになろうとする私の慢心を静め、ひたすらキリストの温順と謙遜に倣おうとした。患者に靴で蹴られる時、顔に唾を吐きかけられる時、私はこれこそ救い主の忍耐を学ぶべき機会だと思ひ、温和な顔で彼に接し、微笑をもつて彼に報いた。私はイタリアの愛国者サボナローの言葉を思い出した。

私が寺院に入ったのは、忍ぶことを学ばんがためである。艱難が私に迫った時、私は学者の眼光をもつてこれを学び、これ(艱難)によつて、常に愛し常に許すべきことを私に教えしめた。

看護人となつて、私は初めて短気が無益で有害であることを悟つた。私は温良が至大な勢力を持つてゐることを学んだ。無限の忍耐のみが慈善家たり得るのだ。白痴教育者として有名であるジェームス・B・リチャード氏はかつて私たちにこう告げた。

汝、一度試みて成功せずんば二度試みよ。二度にて足らざんば百度試みよ。そして、なお汝の目的を達することができなければ、二百度、三百度、四百度、五百度試みよ。寛大であれ。一千一度試みよ。

キリストが言われる七十度を七倍する寛容とはこのことを言うのだから。実に忍耐なき者は慈善家たることは

できない。慈善病院はキリスト信徒の最高の試練の場所である。これに耐える者のみがナザレのイエスの弟子たるのだ。説教壇も講義室も、信徒の真偽を判別する場所ではない。

慈善は天使の職であるに違いない。慈善なき宗教も道徳も、真正なものではない。慈善は宗教の花であり実である。その国が行う慈善によって、その道義心の程度を察することができる。神社仏閣がどれほど壮麗であつても、孤児を飢えて泣かせる国民は、君子の国という名称に預かることはできない。

しかし、慈善は善人を造るものではない。慈善は愛心の結果であつて、その原因ではない。「慈善事業に従事すれば自ら慈善家となり得る」という観念は、事実らしく見えて事実ではない。心の中に既に慈善の心が存在する時、悲哀に沈む者を見て、ついに大慈善家となった人は少なくない。ジョン・ハワードがフランスの監獄に繋がれていた時、その悲惨な状況を見てついに監獄改良者となったように、ムーン氏がアルプス山中で盲目の少女が「アヴェ・マリア」の祈りを唱えているのを見て、ついに盲人教育の先導者となったように、慈善は私たちの心の中に存在する慈善心を鼓舞するものであることに違いない。しかし、噴水が水源の平面より高く上ることができないように、慈善も私たちの心の中に存在する愛心を超えることはできないのだ。もし愛心を超える慈善を実行しようとすれば、慈善は変じて偽善となり、慈善の快樂は完全に去つて、不平、傲慢、功名心などの悪霊が来て、再び私たちを悪魔に引き渡すに至る。信仰に不相応な慈善ほど危険なものはない。慈善が多くのキリスト信徒のつまずきの石となったことは悲しむべき事実である。

パリサイ人は立って、心の中でこんな祈りをした。「神よ。私がほかの人たちのように、奪い取る者、

不正な者、姦淫する者でないこと、あるいは、この取税人のようでないことを感謝します。私は週に

二度断食し、自分が得ているすべてのものから、十分の一を献げております。」

(ルカの福音書十八章十一節、十二節)

私を自ら高ぶらせるに至れば、私の善行は私の敵である。墮落は高いところから落ちるほど激しい。人がもし慈善という高き所から落ちる時、ほとんど再び回復することができないに至る。

慎め、お前、孤児院を設立して神と人に仕えようと欲する者よ。お前の慈悲心が既に世人の承認するところとなり、お前が無私なる慈愛家として世に賞揚される時、これこそお前が無限地獄に墮落しようとする危急の場合だと知れ。特にこの物質的な時世において、事業が精神よりもはやされる時、この危険は最も大きい。エリザベス・フライ夫人は、彼女の声名が天下に響き渡り、国王が彼女に謁見を賜わろうとした時、恐れて逃げ、跡を隠したと言われている。ハワードの遺言は二つしかなかった。すなわち、狂気を病んだ彼の息子の回復を願うことと、彼のために石碑を建てないことであつた。私に敵があるこそ幸いである。私の名が知られないこそ安全である。慈善家たる名に対し、誰が神聖なる敬慕を示さないだろうか。もし世に非常に功名を求める者がいて、最も平易に公衆の尊敬を受けようと望むならば、慈善事業に従事すべきである。説教家として平凡な者も、政治家として名がない者も、慈善家としては世の注意を惹くことができるのだ。私は心にこの危険を感じてから、慈善事業に従事する人を傍から褒め称えることをやめた。そのような人が偉人であれば、賞賛されることを迷惑に感じるだけである。小人であれば、これがために誇り、危難を彼の靈魂に導くことになる。キリストはこう言つて

いる。

人に見せるために人前で善行をしないように気をつけなさい。そうでないと、天におられるあなたがたの父から報いを受けられません。ですから、施しをするとき、偽善者たちが人にほめてもらおうと会堂や通りでするように、自分の前でラツパを吹いてはいけません。まことに、あなたがたに言います。彼らはすでに自分の報いを受けているのです。あなたが施しをするときは、右の手がしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが、隠れたところにあるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見えておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

(マタイの福音書六章一節から四節まで)

ああ、これこそ今日我が国の慈善と称するものであろうか。慈善音楽会、慈善舞踏会。一つの慈善が百の新聞に掲載され、百の弁士の口頭に上る。今や人類は善行の飢饉を感じつつあるのだ。一つの行いが万の言葉をもって天下に吹聴される。恐るべきは慈善家の名である。

私は安心術として、慈善事業が無益であることを悟った。否、無功であるだけでなく、私は一層私の欠点を指摘され、なお一層の恐れを抱き、以前に勝って心霊と未来の危険を感じるに至った。

羽翼あればいずこに飛ぼう、我が魂よ、

事業へか、心からせぬ空虚な形式の事業へか。

永遠の嵐はここに吹かないか、事業には、死せるうわべの事業には。
恐るべき声をもって事業は答えた、

「ここにない、迷える魂よここを去れ。」

ヘンリー・バートンの歌